

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第1号 畜産

発行日 平成23年 3月23日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

配合飼料の供給が不足しているため、メリハリをつけて給与しましょう。
乳房炎の蔓延防止に努めましょう。
草地の追播の検討、施肥の準備を進めましょう。

《東北地方太平洋沖地震の影響に対する技術情報》

1 飼料給与について

配合飼料等の供給が困難なため、飼料不足が続いています。このため、次の事項に留意して飼養管理に万全を期してください。

(1) 乳用牛

ア 健康への影響を最小に削減！メリハリのある配合飼料等の給与

分娩して日が浅い泌乳初期の牛や分娩間近の乾乳牛は、栄養不足の場合、体に蓄積したエネルギーを利用し続けるため、ケトosis等の代謝障害など周産期疾病の発生、免疫力の低下が懸念されます。また、授精をひかえていることから、出来るだけ通常の配合飼料等の給与とします。

配合飼料の調整は、比較的影響の少ない泌乳中・後期の牛で行います。その際には、出来るだけ腹を満たすために、いつもより粗飼料を増給してください。(下表を参照)

表 配合飼料 1kg に相当する粗飼料給与量の目安

牧草サイレージ (乾物 50%、TDN55%)	イネ科乾草 (乾物 88%、TDN55%)	トウモロコシサイレージ (乾物 30%、TDN70%)
2.0～3.0kg	1.5～2.0kg	3.5～4.0kg

※配合飼料 1kg の TDN 量を換算

イ 飼料を切り替える場合には

やむを得ず、低品質の飼料に切り替える場合には、泌乳初期の牛、乾乳牛への給与は避けます。

(2) 肉用牛(繁殖牛)

分娩前後の牛が最優先！メリハリのある配合飼料等の給与へ

子牛の発育のため、胎子の発育と母牛の泌乳量の確保は重要です。このため、分娩前後(前後1ヶ月程度)の繁殖牛と育成前期牛(5ヶ月齢程度まで)は、出来るだけ通常どおりの給与量とします。配合飼料の節約は、授乳後から分娩1ヶ月前程度の牛で行い、その際には、粗飼料の飽食に努めてください。

(3) 肉用牛(肥育牛)

仕上げ期が最優先！メリハリのある配合飼料等の給与へ

肉質に影響の大きい後期牛は、出来るだけ影響のないよう調整し、前期牛の配合飼料を節約します。粗飼料に余裕がある場合は配合飼料を減らした分粗飼料を増給し、空腹によるストレスを軽減するよう努めてください。

(4) 元の給与量に戻すには

配合飼料等の供給が開始され、給与量を元に戻すには、急に元の量に戻さず、糞の状況等を見ながら段階的に戻してください。

2 乳房炎予防について

停電から復旧までの不定期な搾乳や、飼料の給与制限のストレス等により、乳房炎の発症が増加しています。獣医師の巡回が制限され、治療に時間がかかることも想定されますので、自ら異常個体の早期発見による蔓延防止と搾乳衛生に努めて下さい。

(1) 異常個体の早期発見

- ア 乳房の腫脹や熱感、冷感がある場合、乳房炎が疑われるので、搾乳時、乳汁の PL テスターにより、感染の有無を確認します。前搾り乳で凝固物(ブツ)が出る場合も PL テスターで確認します。
- イ 感染が確認されたら、搾乳順番を最後にし、蔓延を予防するとともに治療を待ちます。
- ウ 乳房炎感染牛や治療牛、体調不良の個体にビタミン剤の給与を検討します。

(2) 搾乳衛生

通常よりも、丁寧な乳頭清拭とディッピングを心がけるとともに、敷料をこまめに交換するなど、牛床を清潔に保ちます。

(3) その他

真空計の針が上がるまでに時間がかかる、レシーバージャージャーが泡立つ、搾乳時間が長くなったなどは、配管のエア漏れが考えられます。配管の接合部等の破損を再度点検し、必要に応じて補修します。

3 生乳の管理について

乳房炎乳、治療牛の生乳などがバルクに混入しないように十分注意し、乳質事故を防ぎます。

《定期情報》

1 草地管理

(1) 冬枯れの発生と対策

冬枯れは、雪腐病や不十分な積雪などの凍害により発生します。また、越冬のために養分を蓄積する秋の刈取り危険帯（10月上旬から11月中旬頃）に刈取った場合、耐寒性が低下することにより、冬枯れが発生します。

冬枯れによって枯死し、裸地が多くなった場合は追播を実施しましょう。また、今年の猛暑により夏枯れが発生したが、追播が間に合わなかった草地についても検討下さい。

(2) 施肥

牧草は平均気温が5℃になった頃から生育を開始します。

トラクタ作業による圃場の泥濘化の恐れがない時期を見計らい、極力早めの施肥で生育を促し、1番草の収量向上につなげましょう。

牧草地における施肥基準は次のとおりです。

	施肥量 (kg/10a)		
	窒素	リン酸	カリ
採草地	10	5	10
放牧地	6	3	3